2019年6月29日

老子会会報

老子会 主催
第018号

老子会のモットー

「老子の道の精神を生かし、自分を変え、世界を変え、未来を変え、世界平和を構築し、人類の幸福を推進していく」ことをモットーとする。

第62回老子会から

老子道徳経　第77章

原文

天之道其猶張弓與。高者抑之、下者擧之。有餘者損之、不足者補之。天之道損有餘而補不足。人之道則不然、損不足以奉有餘。孰能有餘以奉天下。唯有道者。是以聖人、爲而不恃、功成而不處、其不欲見賢 。

書き下ろし文

天の道はそれ猶(な)お弓を張るがごときか。高き者はこれを抑え、下(ひく)き者はこれを挙(あ)ぐ。余りある者はこれを損(そん)じ、足らざる者はこれを補う。天の道は余り有るを損じて而(しか)して足らざるを補う。人の道は則(すなわ)ち然(しか)らず、足らざるを損じて以(も)って余り有るに奉(ほう)ず。孰(た)れか能(よ)く余り有りて以って天下に奉ぜん。唯(た)だ有道の者のみ。ここを以って聖人は、為(な)して而も恃(たの)まず、功成りて而も処(お)らず、それ賢を見(あら)わす欲(ほっ)せず 。

現代語訳

無為自然の天の道は、弓に弦を張るときと似ている。上の部分は下に引き下げ、下の部分は上に引き上げる。弦の長さが長すぎれば短くし、短すぎればつぎ足す。この様に天の道は余った所を減らして足りない所を補っているのだ。しかし人の世の道はそれとは逆で、足りない所からさらに奪って余っている所に補っている。自らに余るものを人々に分け与える者は誰であろうか。それは「道」を知った者だけである。そうして「道」を知った聖人は、何かを成し遂げてもそれに頼らず、過去の功績にいつまでもしがみつかず、自分の賢さを人に誇る事も無い。

解釈

富の再分配についておっしゃっているのである。老子はこの様な「富の再分配」の発想を持っている。
概念や発想があったかどうかはともかく、富の分配を適正に行うことは政治の重要な仕事の一つである。人間の歴史は富の分配方法をめぐる闘争の歴史と言っても過言ではないくらいである。日本の武士たちが農地の所有権を求めて作った鎌倉幕府なんかが解りやすい例であるが、没落武士の救済を目的として幾度と無く行われた**徳政令**なんかも富の分配方法の是非を語るのに良い例の一つである。

徳政令（とくせいれい）とは、日本の中世、鎌倉時代から室町時代にかけて、朝廷・幕府などが土倉などの債権者・金融業者に対して、債権放棄（債務免除）を命じた法令である。
土倉は、鎌倉時代および室町時代の金融業者。現在の質屋のように物品を質草として担保とし、その

第62回老子会から

解釈

質草に相当する金額の金銭を高利で貸与した。

鎌倉時代の例のように、武士を基盤とした政権は武士の没落を防ぐために武士に対して富を多く分配しようとするものである。

老子の時代はおおまかに言って封建制度から中央集権制度への過渡期であるが、多くの王侯は自分を支える士大夫ばかりを保護して富の偏重をきたしていたのであろう。最終的に法家の思想を用いて中央集権制度を確立し、士大夫階級の権力を制限することに成功した秦が天下を統一したという流れはこれまで何度も語ってきたであるが、統一後も中央集権を推進し巨大公共工事を繰り返して、客観的に見れば富の再分配をかなりの規模で行った秦がたった15年で滅んだというのもまた皮肉な話である。

富の再分配を適正に行うことが政治の重要な仕事の一つとは言っても全てではないわけであるから、この事のみをもって政治や歴史を語るのはどうかと思うのであるが、余っている所から取って足りない所に補うというだけで世の中うまくいくなら為政者は何も苦労しないであろう。重要なのはそのやり方とバランスであろう。老子は考えている。

老子の時代には政治の重要な役割の一つである「富の再分配」という概念が無い(或いは非常に希薄)ので、国家の支出のほとんどは支配層の欲が原因だという認識だったのであろう。被支配層から見れば無駄としかいい様の無い浪費を非難するのは当然としても、何をもって無駄とするかは慎重な判断が必要とされるであろう。

たとえば秦の始皇帝は中華統一後、万里の長城や始皇帝陵や阿房宮といった巨大建設事業を行い、これらにかり出された人々の恨みを買った事が秦滅亡の原因の一つと言われているのであるが、これらの事業を無駄と決め付けるのは少し早計である。

第２９章でも話したであるが、天下を統一して平和が訪れた後で君主がもっとも気を配らねばならない事の一つは、大量に発生する兵士の失業者対策である。

彼らの多くが徴兵された農民だとしても、そのほとんどが次男や三男なので故郷へ帰っても十分な農地が無いというのが実情であった。当時の灌漑・農耕技術などを考えても農地をすぐに増やすのは不可能だと思われるので、彼らに仕事を与えるとしたら軍を率いて外征にでるか公共事業をするしか無い。しかし始皇帝は長く続いた戦乱の後でさらに民衆に対して戦争を強いる事は避けたかったのであろう、「だから中華と周辺諸国の境を定めるために万里の長城を築いた」というのが拙者の見解である。これは秦始皇帝の公共事業である。

まあ必要以上に工事を急いで厳しい規則を課し(工事の日程が少しでも遅れれば打ち首)、結果民衆の恨みを買ったというのは事実であろう。戦乱の時代ならば負ければ他国の兵士による略奪にあうので厳しい軍規にも従っていられるであろうが、平時の賦役にも同じ様な規則を課されたのではたまったものではならない。無理をせず自分の死後三代くらいをかけて徐々に統一後の事業を進めれば秦の滅亡も無かったかも知れないのである。

ことわざ

足るを知る者は富む

「足、知、者、富」

分相応の現状に満足できる者は、生活が貧しくても、心は安らかで豊かだということ。

「富」の類義語と対義語

富の類義語　　**身代(しんだい)**《「進退」から転じた語か》

一身に属する財産。資産。身上(しんしょう)。

「身代を築く」「身代を持ち崩す」

富の対義語　**富⇔貧**

貧にして楽しむ(ひんにしてたのしむ)

品性が高く教養のある君子は、貧しい中にあっても学問やそのほかの生活に楽しみを見いだしてあくせくしないということ。

老子道徳経　第78章

原文

天下莫柔弱於水。而攻堅強者、莫之能勝。以其無以易之。弱之勝強、柔之勝剛、天下莫不知、莫能行。是以聖人云、受國之垢、是謂社稷主、受國不祥、是謂天下王。正言若反。　。

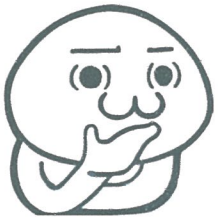
書き下ろし文

天下に水より柔弱(じゅうじゃく)なるは莫(な)し。而(しか)も堅強(けんきょう)を攻むる者、これに能(よ)く勝る莫し。その以(も)ってこれを易(か)うるもの無きを以ってなり。弱の強に勝ち、柔の剛に勝つは、天下知らざる莫きも、能く行なう莫し。ここを以って聖人は云(い)う、国の垢(あか)を受く、これを社稷(しゃしょく)の主と謂(い)い、国の不祥(ふしょう)を受く、これを天下の王と謂うと。正言(せいげん)は反(はん)するが若(ごと)し。

現代語訳

この世に水よりも柔らかく弱々しいものは無いが、それでいて固く強いものを打ち破ることにおいて水に勝るものも無い。その性質を変えることのできるものが存在しないからである。弱いものが強いものに勝ち、柔よく剛を制すとは世によく知られたことだが、それを行うとなると難しい。そこで「道」を知った聖人は言うのだ、「国家の屈辱を甘んじてその身に受ける者、その人が国家の主であり。国家の災いを甘んじてその身に受ける者、その人が天下の王である」と。本当に正しい言葉は普通とは逆の様に聞こえるものだ。

解釈



柔軟で静謐を保ちながら事あれば強く固いものを打ち破る水に例えて、柔軟に謙(へりくだり)り時には屈辱にも耐える処世術を勧めているのであろう。有名なところでは「臥薪嘗胆(がしんしょうたん)」とか、あるいは「韓信の股くぐり」とか、大望を果たすためには一時の恥や屈辱には耐えることが必要だという教えの故事は多いである。

しかしながら、こういう事を知識として知ってはいても、実際に自分が屈辱を受けるとついかっとなって我を忘れてしまうのが人間というものである。

老子の生きたおおよその時代春秋戦国時代は戦乱の時代であるが、生き残り戦略としての領土の維持・拡張を目的とした不可避の戦闘だけでなく、国家や君主の体面を主たる理由とした戦略的にあまり価値の無い戦闘も数多くあったのである。

臥薪嘗胆の故事では、越を破って強国にのし上がった呉王夫差(ふさ)は、他国へ攻め入る前に後背の越を完全に滅ぼすべしと言う伍子胥(ごししょ)の忠告を聞かずに、覇者を目指して戦略的にあまり価値の無い示威的な出兵を繰り返して国力を疲弊させ、ついにはその間に国力を回復した越王勾践(こうせん)に国を攻め滅ぼされたのである。国家同士が熾烈な生き残り競争をしている時代に、戦略的に無価値な争いをするような国は滅んで当然である。

世の中に水よりも柔らかくて、しなやかなモノは無い。それなのに、水は強くて堅いものにも打ち勝つことが出来るのだ。水本来の性質が、変わる事が無いからである。しなやかなものが堅いもの負(ま)かして、柔らかいものが強いものを負かすって言うことは、すべての人が知ってるのであるけど、それを人生に応用できてないのである。

そういうワケで聖人は、「国全体の汚い部分を引きうける者は、君主になる。天下の災いを引き受ける者は、天下の王となる。」って言うのである。正しい表現は反対に聞こえるモノなのである。つまり、この章では、考え方や捉え方は柔軟に、と言う事が大切だ、と老子は言っている。

水は天下で最も柔軟で弱く見えるものである。しかし、ひとたび堅いものを攻める時、これに勝るものはない。それは水が本質（＝柔軟である）を変えないからである。天下、このことを皆知るも、実行できるものはいない。

そこで聖人は言う。

国の穢(けが)れを受けるものが国の主である。
国の災難を引き受けるものが天下の王者である。
正しい言葉というものは、反対のようである。

要するに、これも柔軟であれということを言うのであるが、春秋戦国時代が、一体どんな時代だったのか、なんとなく見えてくるような気がする。

老子会の『人』藤本　政志さん

藤本政志さんは、愛媛県今治市出身。「伯方の塩」で有名な、瀬戸内海の伯方島で生まれました。

中学時代はバレーボール部に所属する一方、日曜日は幼稚園の頃から好きだった野良仕事を手伝う自然少年でした。（実家はミカン農家でした）

下宿しながら通った今治西高校では、入学前に野球部に入部が決まっていましたが、怪我のため断念。同期は甲子園でベスト４に入る成績、藤本さんも甲子園球児になっていたかもしれません。以後、勉学に没頭し愛媛大学に現役合格。しかし「第一希望の東大」を諦められず上京、河合塾で浪人生活に突入します。挑戦は続きましたが結果が出ず断念。住居を移していた大阪で印刷関連の会社に就職します。30歳の時、出版社を立ち上げ独立。その後、縁あって広告代理店の印刷物の仕事をすることに。現在は、自ら「広告代理店」(有)藤本プランニングを経営されています。

奥様は5歳年上の姉さん女房。藤本さんが「民主音楽協会」の推進委員をしていた時、イベントに誘ったのがきっかけで結婚。新婚から、奥様の実家で同居されており、いわゆる「ますおさん」とのこと。

胡先生との出会いは古く、仕事関連で20年前に遡ります。老子会へも先生から連絡を頂き参加、「藤本さんが一番古い付き合い」との言葉に、心から感謝されています。楽しいことが大好きで、座右の銘は「前進あるのみ」。還暦を迎え「さあこれからだ」と生命力満々の藤本さんに、元気を頂きたいと思います。

（余保充徳）

＜老子会の皆さんへ＞

８年前、ミナミの焼き鳥屋で香港から来た３人組と同席。少し笑わせる芸がきっかけでその中の一人の女性とメールするように。私に日本語を教えてほしいと。以来、その女性にとって私が日本語の先生に。その彼女から香港逃亡犯条例のデモに参加するとラインが。私はくれぐれも無理をしないよう、無事を祈っていますとラインを。この老子会での“学び”が世界に充満することを願っております。

（藤本政志）

事務局からの「第６３回老子会」のご報告

５月は、久しぶりに甲南大学で行い２３名が出席。〃貧にして楽しむ〃「品性が高く教養ある君子は、貧しい中にあっても、学問やそのほかの生活に楽しみを見出しあくせくしない」との講義に感銘を受けました。交流会は「とらの穴」にて親睦を深め合いました。７月で全８１章を修了します。今後、老子会は「一般社団法人」を設立し新たな体制で事業を進めていきます。老子会の皆様には８月の総会でご案内申し上げます。季節の変わり目、梅雨に入り、皆さまくれぐれもご自愛ください。

石井　政　事務局長

【今後の日程】

７月２７日（土）１５時　甲南大学　633教室　老子会　学習会

※両月とも、終了後「虎の穴」にて懇親会を予定しています。（3500円）

８月３１日（土）１７時　道頓堀ホテル　　老子会総会

老　子　会

〒658-8502
神戸市東灘区岡本8-9-1
甲南大学　国際言語文化センター　胡金定研究室

電話: 078(435)2353
携帯番号:090-9169-2820(事務局長)
FAX: 078(435)2545
E-mail　kokintei@konan-u.ac.jp